令和7年度総務省行政事業レビュー公開プロセス

令和7年6月16日

【阿南会計課長】 ただいまから、令和7年度総務省行政事業レビュー公開プロセスを開催いたします。

本日の進行を務めさせていただきます総務省行政事業レビュー推進チーム事務局、会計課長の阿南です。よろしくお願いいたします。

本日の会議の様様につきましては、インターネットで生中継をしております。先生方は、御発言の際はテーブル上のマイクをオンにいただき、御発言されないときはオフにさせていただきますよう、お願いいたします。

それでは、議論に先立ちまして、本日御出席の有識者の先生方を御紹介させていただきます。

初めに、総務省行政事業レビュー外部有識者の先生方を御紹介させていただきます。

本日の議論の取りまとめ役である明治大学専門職大学院ガバナンス研究科専任教授、西出順郎先生です。

【西出座長】 明治大学、西出でございます。よろしくお願いいたします。

【阿南会計課長】 次に、明治大学専門職大学院ガバナンス研究科専任教授、出雲明子先生です。

【出雲先生】 出雲明子です。どうぞよろしくお願いいたします。

【阿南会計課長】 次に、筑波大学人文社会系教授、楠茂樹先生です。

【楠先生】 楠です。よろしくお願いいたします。

【阿南会計課長】 続きまして、行政改革推進本部事務局の外部有識者の先生方を御紹介させていただきます。

株式会社小西美術工藝社代表取締役社長、デービッド・アトキンソン先生です。

【アトキンソン先生】 よろしく申し上げます。

【阿南会計課長】 次に、ボストンコンサルティンググループ マネージング・ディレクター&パートナー、瀧川哲也先生です。

【瀧川先生】 瀧川です。よろしくお願いいたします。

【阿南会計課長】 有識者の先生方におかれましては、御多用のところ御参加いただきま

して、誠にありがとうございます。

それでは、本日のスケジュールについて御説明します。

今回の対象事業は3件で、それぞれ1コマ1時間を目安に御議論いただきます。各コマでは、最初に事業担当部局から事業の概要を10分程度御説明いただきます。次に、私から論点を御説明します。この論点は、先日開催した事前の勉強会におきまして、有識者の皆様から寄せられた御意見と、御質問のうち宿題となっていた事項を整理したものです。本日の審議は、この論点に沿って進行させていただきます。各論点について、勉強会で御発言のあった有識者の皆様から御説明いただき、それに対して担当部局から回答をいただく形で進めさせていただきます。事前勉強会で出なかった新たな論点、御質問については、関連した論点のところで御発言いただいても結構ですし、論点に沿った議論が終わった後にも御発言の時間を取りたいと思います。30分程度御審議いただいた後、有識者の皆様から提出していただいたコメントを西出先生に取りまとめていただきます。時間割につきましては、お手元に配付している公開プロセス時間割のとおりでございますけれども、本日はインターネットで生中継している関係から、時間内の御審議に御協力いただきますよう、よろしく願いいたします。

(1) スタートアップ創出型萌芽的研究開発支援事業

【阿南会計課長】 それでは早速ですが、本日1つ目の「スタートアップ創出型萌芽的研究開発支援事業」について議論に入ります。

初めに、担当部局から10分程度で資料に沿って説明をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

【説明者】 ありがとうございます。国際戦略局技術政策課の松井です。

本日は、「スタートアップ創出型萌芽的研究開発支援事業」について御説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

資料1ページ目でございます。本事業でございますけれども、政府の「スタートアップ育成5か年計画」に基づきまして、令和5年度より本事業を実施してございます。

こちらの事業でございますけれども、公募で選抜されたスタートアップに対して、ICT分野における研究開発の支援、官民一体の伴走支援ということで支援を行っている事業でございます。

また併せて、伴走支援につきましては、民間有志企業等の協力を得る形で「ICTスタート

アップリーグ」という活動を通じて、この事業の外で支援をするという枠組みを設けて実施しております。

事業の概要が下にございますけれども、SBIR制度の補助金制度に基づきまして、フェーズ1のPoC、それからF/Sの支援のところでは最大300万円（1年間）、それから、フェーズ2の実用化開発で最大2,000万円（1年間）について支援をするスキームになっております。フェーズ3以降は、民間資金の調達が得られるような伴走支援というのを併せて行っているところがございます。伴走支援につきましては、下にございます様々な人材確保のサポートから特許取得支援、事務処理のサポート、こういったところも含めて行っているということがございます。こちらの支援額ですが、基本的には補助率10分の10で実施しているということがございます。全体のトータル予算額としては、令和7年度の予算が3億円、また、令和6年度は当初予算と補正予算、合わせて3億円ずつ、合計6億円となっております。

次のページに、令和6年度の採択者の一覧を掲載させていただいております。フェーズ1が7件、フェーズ2が15件でございます。また、先ほど申し上げたICTスタートアップリーグにおける参加、政府、総務省からの支援金は受け取らずに、伴走支援であるICTスタートアップリーグのみの参加というのが4件ございます。

次のページに、本事業の選考プロセスについて掲載させていただいております。こちら、令和6年度の実績値でございますが、応募数が383件、これに対して書類選考で150件に絞って、各150件について面談を行いまして最終候補54件、その中から最終審査会で採択者22件という形での選考プロセスを行ってございます。

選考に当たっては、書類選考から面談において、特に事業化までしっかりと熱意を持ってやれるかといったところも、評価の有識者の方々にしっかりと面談で選考いただいて、最終的な事業実施、特にICT分野の関連性とか技術の独自性、社会的なニーズ、計画がしっかりしているかということを審査会で最終的に判断して、採択者を決定しているところがございます。現在、今年度事業の最終審査に向けた準備を行っているところがございます。

次のページに、伴走支援について記載させていただいております。事業化に向けた伴走支援としては、今、ここにあるメニューで行っておりますが、1つは海外展示会への参加ということで、昨年度につきましては、バルセロナのMWCへの出展を行ってございます。

そのほか、国内での伴走支援といたしましては、ピッチ・マッチングのためのイベントの開催、研究開発・起業ノウハウに関する勉強会等、特許申請支援・起業・広報に関する助言支援、他省庁との連携ということで、他省庁から情報提供があったものについて御紹介する

といったことも行っているところでございます。

次のページから令和5年度、令和6年度の支援事例ということで、令和5年度については応募総数347件から採択40件、フェーズ1が23件ということで多くなってございました。令和6年度については383件の応募から採択が22件ということで、こちらはフェーズ2が15件と多くなってございます。また、令和5年度のフェーズ1から令和6年度のフェーズ2に移行された方が2件ということでございました。こちらに具体的な例を幾つか御紹介させていただいております。フェーズ1からフェーズ2に移行して、さらに支援を受けていらっしゃる企業も、これだけございます。それで、今、具体的な取組を進めていただいております。

また、異能vation卒業生とございますのは、このスタートアップ創出型萌芽的研究開発支援事業の前身となる異能vationというプログラム、これはSCOPE事業の中で行っておりました全く新しい破壊的なイノベーションを起こすアイデアについて300万円の支援をするという事業でございましたが、こちらの卒業生が採択されてアイデアを磨かれた後に、スタートアップとしての支援を受けて、さらに取り組んでいらっしゃるという事例がございますので、こちらも御紹介させていただきます。こちらについては、今、8億円を超える民間資金調達を獲得しているという例になってございます。

それから、次のページが民間の取組としてのICTスタートアップリーグということで、事業としての伴走支援もございますが、さらに広く、様々な協力いただける民間企業、団体からの支援あるいはメディアへの発信、こういったこともスタートアップにとっても非常に、磨いていく、さらに発展していただくための重要な場となると考えてございまして、ICTスタートアップリーグという活動を進めていただいております。我々総務省もサポートしております。特に、事業を卒業した方々も引き続きこの中に参加いただいて、採択者同士の交流を深めていただいたり、そういう中で新しい動きを起こしていただける、そこに対して、また民間企業もサポートいただける、そういうような場を目指して、今こちらの取組も並行して進めてございます。

次のページで、アウトカムとの関係を御説明させていただきます。今回、短期・中期・長期のアウトカムの見直しを行ってございます。特に事業を開始して行っておりました今までの短期・長期のアウトカムとして、優れた成果が見られた研究開発の件数と投資件数ではかるということにしておりましたが、中期の目標は設定しておりませんでした。そういう中で、短期につきましては、少しその内容を見直した上で、優れた成果が見られた研究開発課題の

件数として、長期に置いておりましたものを事業開始から3年後における投資件数ということで、それを中期に設定して、長期として、事業終了、これは令和9年度までの事業ということで予定しておりますが、翌年度、令和10年度において調達後の企業評価額が5億円を超える卒業生、採択者の件数ということで、今回、指標の再設定を行ってございます。こちらについては、SBIR制度で掲げております初期・中期・最終アウトカム、このモデルを参照に再設定を行ってございます。

次のページに、もう少し詳細なところで、終了評価基準の見直しということで挙げてございます。短期アウトカム、全体としてよい取組であるということの評価するところで、今まで行っていました。令和5年度においては、資金調達の達成状況を重視して、研究開発期間に資金調達を達成したといったところのA、B、Cの3つの評価でやっておりましたけれども、今回、より詳細に事業を通じた成長が見られるようにということで、総合性、事業性、技術性という評価項目を設けまして、総合性につきましては5ポイント、事業性、技術性については合わせて3ポイント、こちらについて評価をして、全体として、その点数による評価を行っていくように変更してございます。

また、長期アウトカムの指標設定につきましては、国内スタートアップデータベース「INITIAL」の基準に準じまして、「調達後企業評価額が5億円を超えた卒業生の件数」を目標として設定させていただいたところでございます。

あと、参考資料をつけさせていただいてございますが、最初の支援事業に関する説明としては以上でございます。

【阿南会計課長】 ありがとうございます。

では、本事業の論点について御説明いたします。論点の紙を御覧ください。

1つ目の論点ですが、適切なアウトカムが設定されるとともに、適切に効果検証がなされているかという点であります。

最初に①ですが、長期アウトカム（調達後企業評価額が5億円を超えた卒業生の件数）について、2点書いてあります。1つ目が企業評価額は時価で変動することを考慮する必要があるという点。それからもう一つですが、件数を指標とすると、5億円を大きく超える大成功したような企業が出てきても、5億円を超えた件数が少なければ評価されないことになるが、それでよいのかという点であります。

次に、②の中期アウトカムと長期アウトカムの両方について、いずれも件数を指標としていますが、分母となる数も記載して割合でも評価できるようにすべきという御指摘がござ

いました。

2つ目の論点は、事業の実施方法が効果的なものになっているかという点であります。

最初に、支援金の上限について議論がありました。①ですけれども、300万円、2,000万円という上限が低過ぎるのではないかという御指摘がありました。

次に、②ですが、他省庁のスタートアップ支援金額と比較してどうなのか、高いのか低いのかという御指摘がありました。

次に、他府省の支援との連携について議論がありまして、③ですが、伴走支援において、他府省のスタートアップ支援事業との連携をさらに進めるべきとの御指摘がありました。

3つ目の論点ですが、調達適正化の観点から、一者応札が多く見受けられるが、改善の余地はないのかという御指摘がありました。

以上が論点であります。

では、以下、論点に沿って議論を進めさせていただきたいと思います。

まず、論点の1番、①ですが、企業評価額は時価で変動する点を考慮することが必要、この点は西出先生から御指摘がありましたので、よろしくをお願いします。

【西出座長】 西出でございます。

この件につきましては、今御説明いただいたことに追加して話をすれば、ありきたりな話ですが、企業評価額というものが非常に変動、その場その場で変わってきますから、これを長期アウトカムの一つとして考える場合においてどう考えたらいいのか、何らかの補正的なものを踏まえる必要があるのか否かとか、それ自体が適しているのか否かというところをいま一度考えたほうがよいのではなかろうかということでお話をさせていただきました。

【阿南会計課長】 まとめて楠先生の質問もいただいてよろしいでしょうか。

【楠先生】 楠です。

私も先ほどの御指摘に関連することだと思いますけれども、5億円で何件というのは、分かりやすい指標ですけれども、件数が少なくても非常に大成功を収めた企業が出てきたという場合には、やはりそれは評価すべきではないかということで、もう少し多角的な観点から、何か数値づくりみたいのができればいいなと思いました。

【阿南会計課長】 では、お願いします。

【説明者】 ありがとうございます。

大変重要な指摘をいただきまして、ありがとうございます。

5億円につきましては、「INITIAL」のデータベースによると、5億円を超えるというのが

スタートアップの中、大体20%を超えるぐらい、上位5分の1というところで、我々としては、一つの分かりやすい基準、そこまでたどり着くと、さらに発展される可能性が高いのではないかとこのところで設定させていただきましたが、御指摘いただいたとおり、やはり時価で変動するということ、また、例えば本当に日本を代表するような大成功の企業が出られた場合に、5億円を超えた件数が例えば1件として、それを事業全体の評価として見ていいのかといったところも非常に重要な指摘をいただいたとっておりますので、我々としては、5億円を一つの目標とは考えつつも、さらに、これ以外の長期のアウトカムの指標についても検討してまいりたいと思っております。

【阿南会計課長】 この点について、ほかの方、何かありましたら。

では、次の②の論点に行かせていただきます。中期アウトカム、長期アウトカムについて、分母についても記載してはどうかということで、まず、瀧川先生から御指摘いただきました。

【瀧川先生】 瀧川です。ありがとうございます。

質問の趣旨は、論点ペーパーに書いているとおり、分母を書いたほうがいいのではないかという話ですが、背景を申し上げると、そもそも論として、このアウトカムというのが投資の件数とか卒業生の件数というのがいいのかと考えたときに、今の指標だと、予算が許す限り投資をしたほうが、当然、件数も増えて結果として卒業生の数も増えるという形に流れがちになると思います。その観点でいうと、投資とか卒業生の件数も大事ですが、それと併せて、実際に投資をした結果として、何割の案件が5億円を超えた会社になったかという比率を評価したほうがいいのではないかと思います。こちらについていかがですか。

【阿南会計課長】 西出先生も同じ趣旨で御指摘がありましたが、何か御追加することはありますでしょうか。

【西出座長】 私は、今の瀧川先生と全く変わらないんですが、もう少し単純でございまして、規模感、どのぐらいの規模でやって、どのぐらい成功したのかというのを読み手としてすぐ分かるような形で提示してもらおうと、より分かりやすく伝えられるかなというような視点で書かせてもらったということで補完させてもらいたいと思います。

以上でございます。

【説明者】 ありがとうございます。

こちらにつきましても、母数を分かる形で、我々自身もしっかりと把握できる、一覧性をもって把握できる形、また、全体の件数、これをしっかり明記することで、我々自身もその評価がしっかりと認識できるような形で、単に一つの成果の数字だけが出るのではなくて、

全体の中での母数をしっかり明記する形でこの事業を示して、また、それを外に示すことで、この事業に対するしっかりとした評価もいただけるように取り組ませていただこうと思います。

【阿南会計課長】 ただいまの論点、ほかの先生方、よろしいでしょうか。

よろしければ、では、次の③に行かせていただきます。短期アウトカムにおいて、外部有識者における終了評価の評価基準は適切か。特に技術性の評価につきまして、出雲先生から御指摘をいただきました。よろしくお願いいたします。

【出雲先生】 出雲です。よろしくお願いいたします。

このたび、終了時の評価基準を見直されて、これまではA、B、Cの3つの軸であったところ、より多面的な評価をされるということで修正されたということを確認しました。具体的には総合性と事業性と技術性という3点ですけれども、事業性の部分は、その事業計画が着実に実施されたということをごさいますして、3つの観点を設定されております。事業が確実に実施されたということを確認される必要は補助金の性質上あると思うんですが、この位置づけが、個別の事業のみならず、この補助金という事業全体としての短期アウトカムになっているものですから、その観点からすると、技術性の部分がより二、三年を踏まえたアウトカムという意味では適切なのではないかと考えたものですから、質問、意見を申し上げたところです。

【説明者】 ありがとうございます。

技術につきまして、今回の我々の事業、スタートアップ創出型で萌芽的な研究開発支援というところをごさいますので、技術の開発が成果として出ているところをしっかりと見ていきたい、この事業の一つの大きな目的でもごさいますので、技術についての評価をしっかりと行っていけるようにしていきたいと考えています。今回は技術性、事業性を合わせたの評価基準にしておりますけれども、この技術性のところをどのように的確に評価するのがよいのかということもさらに検討させていただいて、評価基準の見直しに、さらに反映させていただければと思っております。

【阿南会計課長】 よろしいですか。

先生、お願いします。

【出雲先生】 今のことに関連しまして、技術性の評価は、やはり事業も多岐にわたっておられるので、とても難しさがあると思います。ですから、現時点では2項目というところなのかなと思ったんですが、技術性を評価する上で、例えば評価の側の体制を見直すである

とか、個別の技術に関しての専門家をそんなに確保できるわけではないと思いますが、どういった工夫あるいは将来の予定がございますか。

【説明者】 採択、それから終了時の評価において、こうした技術の評価に御知見のある専門家の方々に入っていただく方向で検討を進めております。必ずそういう形で、技術についても、しっかりと評価していただける体制というのをつくってやっていきたいと考えております。

【出雲先生】 分かりました。以上です。

【阿南会計課長】 今の点につきまして、ほかの先生方、よろしいでしょうか。

では、続きまして、論点の2番でございます。

①支援金の上限（300万円、2,000万円）ですけれども、これは低過ぎるのではないかとアトキンソン先生から御指摘いただきました。よろしく願いいたします。

【アトキンソン先生】 5億を超えるような会社云々という話が出ていますが、1年目のときに300万、2年目のときに2,000万、この根拠は何に基づいた根拠なのかということをお教えいただきたいと思います。あと、申請してくる人たちの女性、男性の割合、平均年齢がどうなっているのか。要するに、どういうエビデンスに基づいてこれが設定されているのかというのは疑問に思います。そもそも、諸外国の論文、検証にはよく指摘されていますが、こういった企業は、アイデアがよければよいほど、そこの経営者となる人のカリスマ性が強い人であればあるほど、政府に頼る必要もなく、政府からの資金調達是要らないぐらいまでできるという世の中に変わっている中で、そもそも、総務省として、なぜこれをする必要があるのかということをお教えいただきたいと思います。

【説明者】 ありがとうございます。

追加提出資料もございますので、その点と併せて御回答させていただければと思っております。

今回の300万、2,000万という金額につきましては、指定補助金等の交付に関する指針のフェーズ1、フェーズ2に沿って検討しております。フェーズ1については300万から3,000万程度、フェーズ2については1,000万から数億円程度ということで幅が広いところですが、我々としては、フェーズ1については300万、フェーズ2については2,000万。

一方で、こちらについても、全額の補助スキームということとさせていただきます。なぜ、総務省としてそのようなスキームにしているかということとございますが、先生御指

摘のとおり、なぜ、政府が補助すること、また、総務省がやるのかというところと、本来だったら、スタートアップの成功されている方というのは、政府の支援も不要で成功されている方もいっぱいいらっしゃる中で、我々としては、できるだけ多くの方々に自分のお持ちのアイデアを出していただいて、そこから起業につなげていただく、そうした起業家の育成、雰囲気醸成ですね、政府が支援することでの醸成等にICT分野のスタートアップから貢献したいということで、その入り口としては300万という、金額で見ると、フェーズ1支援の一番低いほうに合わせておりますけれども、裾野を広げるという意味での300万。それから、300万のアイデアから、さらにフェーズ1からフェーズ2に進んでいただくことも想定して、あまり段階的に、妥当なところではないかという我々判断の下で、2,000万としてございます。これが資料1につけさせていただいてございます。

また、資料2で、ほかの省庁の施策との比較をさせていただいておりますけれども、この中を見ると、総務省のフェーズ1、300万、フェーズ2、2,000万というのは、全体で見ると、額としては、やはり少ないほうになるかなと認識しております。他省庁のスキームですと、金額の大きいものについては、10分の10の補助ではなく3分の2の支援とか、補助率において差があるという状況でございます。我々としては、令和5年度からの実施事業でございますので、できるだけ広く、多くの方に、まず、このスキームを使っただけのようにということも考慮いたしまして10分の10。また、ICT分野は非常にスピード感を持って進めていく分野だと思っておりますので、そういう意味では、初期の段階をできるだけ10分の10で補助することで早く成長していただく、そういったことにつながるスキームになればということで、この金額にしているというところでございます。

ひとまず、追加資料と合わせての御説明は以上でございます。

【アトキンソン先生】 指針で決まっているというのは、説明になっているような、なっていないような話ですが、そもそも、その指針の中で、何をもって、何を検証して、300万円、2,000万円にしたのかというのを聞きたいんですが、ここに書かれている云々ということではなくて、ほかの省庁云々ということでもなく、300万円というのはどういうデータに基づいて決めたものなのかということで、現実性があるのかないのか、これをもって成長ができるかできないのかということをお願いしたいです。

【説明者】 この300万円につきましては、何か具体的に積み上げた数かというとなかなか、そこまでできておらず恐縮ですけれども、我々、異能vationという破壊的な新しいアイデアを出していただくという事業を10年やっておりまして、それが300万円の支

援で行っておりました。フェーズ1につきましては、それで様々なアイデアが出てきたというところがございますので、最初のスタートアップのアイデアのところについては、300万の支援を引き続き継続して実施することで、多くの方々にお持ちのアイデアをまず概念として固めていただくための支援を300万と設定しているところがございます。フェーズ2の2,000万につきましても、2,000万でなければ絶対いけないのかというところにつきましても、これは事業を進める中でしっかりと検討していく必要があるだろうと。我々としては、300万の次に進めるフェーズとして、その段階として2,000万という数字を置いておりますけれども、こちらについても、事業の状況を見ながら、その予算事業の中で、本当にどのぐらいの数字であればいいのか、また、必ずしも2,000万でなければいけないということではなくて、この採択においても、2,000万より少ない額で採択される方もいるのですが、上限を2,000万に置いているところですが、もっと柔軟にしていけばいいというところがこの事業実施の中で見えてくれば、そこもしっかりと、2,000万にこだわらず、事業のスキームとして考えていきたいと思っておりますが、2,000万として置いている状況の説明としては、以上の理由となります。

【阿南会計課長】 すみません、議論の途中ですけれども、有識者の先生方におかれましては、御議論いただきつつ、コメントシートの記入を始めてください。14時15分めどで回収させていただきます。

では、アトキンソン先生、お願いします。

【アトキンソン先生】 300万であれば、最低賃金で働く人の1.5倍、2,000万であれば、大体10人程度ということになります。日本を代表する企業、破壊的なアイデアというのを出せるような根拠が不透明である以上は、これをエビデンススペースに変えるべきではないかと思えます。件数で見ると数十件になっていますけど、法人企業統計の2023年度で見ますと、日本企業は299万1,782社になっていますけれども、それに対して0.000何%となっていますので、最低賃金1.5人分しか出さないことによって、昔から云々ということではなくて、本来であれば、根拠を定めてきちんとした形にすることによって、日本経済に対して、もっと貢献的な制度に変えることができるのではないかと私としては思いますので、コメントとして、以上にさせていただきます。

【阿南会計課長】 では、関連して②の論点ですが、先ほど部局から資料が出ましたけど、西出先生が他省庁のスタートアップ事業との比較と言われまして、資料の紹介がありましたけど、追加で何かコメントがありましたら。

【西出座長】 それではコメントとしてお話しさせてもらおうと、なぜこのようなことが気になったかと申し上げますと、肌感覚として、この金額で何ができるのかなとは思いました。研究者として研究費を科研として頂戴するとき、300万みたいなのが科研費Cみたいなのでありますが、そのレベルで何ができるかというところから想定するという、ちょっとレベル感が違うのかもしれないが、300万、2,000万ということを見たときに、安いなと思ったところがあるので、他省庁との比較をしたかったということです。結果的に低いという話であるならば、今、アトキンソン先生がおっしゃったように、私、根拠の話まではちょっと分かりかねるところがありますが、やはり予算の文脈での話であるならば、選定数を削ってでも1社当たりにも重きを置くような考え方も大事なのではないかなと。要は200が400になれば、2,000が4,000になれば、選定する先というのは2分の1になるという単純な話ですけど、そのような形で、マシンガンをたくさん撃つよりも、大砲をどかんと撃ちましようよというような非常に単純な発想ではありますが、スタートアップとして、イニシャルのところできっかりと支える以上は支えてあげないと、中途半端な支えではどうかと思ったものですから、このような質問をさせてもらったという補足コメントです。以上です。

【説明者】 ありがとうございます。

西出先生、アトキンソン先生からいただいた、我々としても、過去10年やっていた事業からというものもございますが、この事業としては令和5年度から始めている中で、我々としても、3年目ということで、この事業の状況が少し見えてきたところがございます。そういう意味でも、この額が本当に適切なのかどうか、総務省として、もう少し金額を上げることでもっと支援ができるのか、あるいは使い勝手も考えて、300万、2,000万にはこだわらず、今進めている成果も見ながら、金額の設定を改めて検討していきたいと思っております。

【阿南会計課長】 ただいまの出資金の金額の論点ですけれども、ほかの先生方、何かありますでしょうか。

では、お願いします。

【楠先生】 楠です。

今までの議論を聞いてみて、この300万円というのがどういう意味を持つのかということですが、本当に5億円とか何十億円というような企業になるポテンシャルがあるのであれば、この金額がなくても民間から何らかの投資があるだろうということは予想されます。個人的には、どちらかという企画コンペのような、企画がすごくよいからアワードを

与えるといった趣旨が若干でもあるのかなと思われま。そういう趣旨がないのであれば、300万がどう使われて、その結果、どういう形での成果に結びついたのかという因果関係というのが明らかにする必要がある、そうすればこういった場でも検証しやすくなると思います。あるいは、公的などから第三者の評価を通じて金銭の付与に至った。それが何らかの信用につながり、より大きな融資につながったといった因果関係があるのか、その辺がもう少し明らかになると議論しやすいのかなと思いました。

【説明者】 ありがとうございます。

こちらも採択者のフォローアップを行ってまいりたいと思います。その中で、この300万というのは本当にどういう価値があったのか、今、先生に御指摘いただいたところで、300万が呼び水となって何ができたのか、あるいは普通、アイデアだと思っていたんだけど、これだとスタートアップに行こうと思っていなかった方にとって後押しになったのかとか、そういったことももう少ししっかりと具体例でお示しできるように、我々の評価の中でしっかりと行って行って、この300万、2,000万に対するしっかりとした根拠、また、これが適切だと考えるところが成果の中でしっかりと見えるように、さらに工夫をさせていただければと。その中で、また、この金額についても、これにとらわれることなく検討してまいりたいと思います。

【阿南会計課長】 ほかの先生方、出資金に関連しまして、よろしいでしょうか。

では、次の論点に行かせていただきます。2番の③伴走支援における他府省等のスタートアップ支援事業との連携を進めるべきという御指摘、出雲先生からいただきました。よろしくをお願いします。

【出雲先生】 出雲です。

私が前回御質問したときには、フェーズ2の2,000万円というのが、フェーズ1はともかくとしまして、比較的、金額が大きいのかなと認識してしまして、そこがこの事業の特徴なのかなと思っていたところですが、今も委員の皆さんからお話があったように、また、追加資料を出していただいたように、他の省庁におけるこういった仕組みはこれよりも金額が大きいということが前は分からなかった点でした。

フェーズ2の金額が比較的あるのかなという前提もあって御質問したところでしたが、いざ、事業化であるとか民間資金へという話になってくると、様々なマッチングですとか、他のこういったスタートアップというのがかなり出てきている段階ということになるかと思ひます。その段階であれば、他の省庁と伴走支援という観点についてはある程度、共通の

枠組みとまではいかないかもしれませんが、共通にできるところもあるのではないかと。金額にもよるのかもしれませんが、その分、共通化することによって、例えば金額を増やせるとか、そういう事業展開もあり得るのかなと前回思ったところでした。

【説明者】 ありがとうございます。

各府省、省庁の施策、今回、御指摘の中で資料として用意させていただいておりますけど、やはり、施策同士の情報共有というのも、さらに進めていきたいと思っております。我々の事業がほかのところでやっている伴走支援の取組というのもしっかりと参考にしながら、また、いろいろな形で資金を得られるような民間、市場へのサポートというのは、やはりそれぞれの事業でやられているので、逆に言うと、我々よりもさらに金額を大きくやっていたところもあるということです、そうしたところとさらに協力できないかといったことも考えていければと思いますし、例えば知財の支援なども、他府省、他省庁の施策を参考にしながら、また、連携できることを考えていきたい。そのための伴走支援の枠組みを我々としてもつくっておりますので、各省相乗りでできる部分というのをさらに考えていきたいと思っております。今の中では、情報を共有して、例えばマッチング事業をやっているところにお互い情報共有したり、そうしたレベルでの情報共有というのは始めさせていただいているところはございますが、さらに、もう少しそこを深掘りして、また、お示しできるような形で連携することを考えていきたいと思っております。

【出雲先生】 はい、分かりました。

【阿南会計課長】 ありがとうございます。

ただいまの他府省の支援の論点につきまして、ほかの先生方、何かありますでしょうか。よろしいですかね。

では、論点の3番ですが、一者応札が多く見受けられるという点につきまして、これは西出先生からいただいております。

【西出座長】 これはまさしく多く見受けられるのではなかろうかということでございまして、やはり何らかの原因があるのだらうと。原因があるから結果が生まれるのであって、多いと感じていますが、そうなるには何らかの理由があるはずであるという仮説に基づいて質問させてもらっていますが、その辺をどのようにお考えになっているのかということで御質問させてもらったということでございます。

以上です。

【説明者】 ありがとうございます。

令和5年度から始めた中で、できるだけ多くの応札をいただけるような周知というのがまだ足りていない部分、この事業に対する注目度というのも低いところもあるのかなということ、また、事業のスキーム自体がどうかということについては、我々自身、これがその制約になっているかどうかというところは、正直、まだそこまで分析はできておりませんが、少なくとも、この事業の入札、応札、公募のタイミングでの周知をまずはしっかりやっていければと思っています。

また、この事業の実施の中での事業評価についても外部の有識者の先生に見ていただいておりますので、そこでもまた御相談しながら、改善の余地がないかということはしっかりと検討させていただければと思っています。

【阿南会計課長】 ありがとうございました。

今の論点につきまして、ほかの先生方、何かありますでしょうか。よろしいでしょうか。

ただいまの論点で、事前に用意した論点ペーパーの議論は終わりましたけれども、このほか、論点ペーパーになかった観点で、何か御意見、御質問ありましたらお願いします。

よろしいでしょうか。

では、コメントシートの記入が終わっていない方は、よろしく願いいたします。

(コメントシート記入)

【阿南会計課長】 コメントシートが出そろいましたので、いただいたコメントシートに加えて、これまでの御議論における御意見等を踏まえて、西出先生に取りまとめ案の作成をお願いします。

(コメントシート取りまとめ)

【阿南会計課長】 それでは、時間になりましたので、取りまとめ役の西出先生から、取りまとめコメント案の発表をお願いいたします。よろしく願いいたします。

【西出座長】 それでは、報告させていただきます。

全てのコメントを瞬時に情報処理できる能力を持ち合わせていませんので、サマライズする形になります。御容赦ください。

総論的には、ICTのスタートアップの創出、育成の事業、目的的には非常に重要であり、さらなる効果的な取組が必要とされているということです。

とはいうものの、アウトカム指標等々についての見直しが必要であろうと。具体的に申し上げていきますと、アウトカムの指標につきましては、新たに設定した中期アウトカムですね、最終年度における卒業生の事業の評価を適切にはかれる多角的な視点での評価の設定

というものをさらに検討を深めていってもらいたいということ、これがまず1つ目です。

それから、中期アウトカムのところだと思うんですけども、私も先ほど申し上げましたが、事業の成果の話として、件数のみならずといえますか、全体の規模でどのぐらいが選定されたか、うまくいったかという形で、規模感をうまく、読み手に分かりやすく表示、提示できるように工夫をしてもらったかどうかということです。これが指標の話になります。

あと、これも指標の話ですね、短期アウトカム指標の話として、外部有識者における終了評価の評価基準ですね、より技術性に着目した評価というところに力点を置いてもらいたい、着目してもらいたいということになるということです。

次は、これはかなり事業の全体に関わる話かなと思われまます。支援金の在り方そのものに言及されているところの話でございますけれども、事業者のいわゆるニーズや他府省の支援金を踏まえた上で、支援金額、それらも含めて、やはり全体的な制度設計の検討というものが必要ではなかろうかということでございます。

また、さらにそういう文脈の中で、いわゆる効果検証という意味で因果的な関係性、こちらにも、より深めて精査に努めていく必要があるのではなかろうかということでございました。

それと、伴走支援の話もございましたね。伴走支援において、やはり他府省のスタートアップ事業と連携と協力、こういうものをより強化していく必要があるであろうということでございました。

最後が、一者入札が多く見受けられるという話でしたけれども、契約においての一者応札の原因分析をより進めていってもらいたいということですね。ぜひとも、一者入札が続いている状況をより改善させていってもらいたいと思います。

あと、その他として、これはコメントの中で印象的だったので、あえて申し上げさせてもらおうと、採択者の皆さんの意見を聞いて、その上で様々なことについて妥当性を考えていくのもよかろうかということでございます。

私からの取りまとめは以上となります。

【阿南会計課長】 ただいま西出先生からあった取りまとめコメントにつきまして、御意見がありましたらお願いいたします。

よろしいでしょうか。

それでは、特に御異論ないようですので、御提示いただいた取りまとめコメントのとおりとしたいと思います。後ほど、書き起こしたものを共有させていただきます。活発な御議論

ありがとうございました。

では、先生方からの御指摘を踏まえまして、担当部局から一言お願いします。

【説明者】 ありがとうございました。

いただきました指摘を踏まえて、さらに事業がよりよい成果が出せるように、また、因果関係、その効果がどうして出ているのかというところも、しっかり見られるように取り組んでまいりたいと思います。特にアウトカム指標の多角的な視点というところ、また、全体の規模感が分かるようにという、これも国民の皆様から見て、この事業の効果がしっかりと見えるようなもの、また、その制度設計のところもしっかりと効果検証、因果関係を示せるような形、また、他府省と他省庁のスタートアップ事業との連携もさらに図って、これが有機的に進めていくことができるように取り組んでまいります。

また、最後にいただきました採択者の意見、これもこの事業をよくしていくためには一番重要なところだと思っておりますので、さらに意見をしっかりと聞いて、この事業の妥当性についても、また広く、しっかりとお示しできるように事業を進めてまいりたいと思います。引き続き御指導いただきますよう、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【阿南会計課長】 ありがとうございます。

それでは、1つ目の事業に係る議論につきましては、これで終了いたします。

楠先生は、ここまでの御参加となります。ありがとうございました。

2つ目の事業につきましては、この後、14時40分から開始いたします。よろしくお願いいたします。